

令和8年1月号

高尾山報

新たな年、手を合わせるひととき

明けましておめでとうございます



執事
深田 洋平



執事長
犬山 秀康



教務課長
杉山 宗聖



法務次長
桑名 善光



庶務部長
藤田 健太郎



法務部長
上村 公昭



信徒課長補佐
野崎 嘉彰



用度課長
大山 文武



参事
佐藤 伸二



信徒課長
桑澤 俊宏

交通安全祈禱殿
高尾山修験道

蛇滝水行道場
高尾山報編集室

琵琶滝水行道場
山内職員一同

令和8年 年頭所感

安寧秩序を願う

大本山高尾山薬王院 中興第三十三世 貫首 佐藤 秀仁



令和八年丙午の新春を迎えるに当たり謹んでご挨拶申し上げます。御信徒の皆様におかれましては期待と希望に満ちた新年をお迎えあそばされました事と心よりお慶び申し上げます。

旧年を顧みまするに、永和年間に俊源大徳により飯縄大権現様がお祀りされて以来、中興開山六百五十年という節目を迎える勝縁の年でありました。当山に於いては様々な記念行事や院内設備の整備が営まれ、以って報恩感謝の浄業と致し御信徒の皆様が叶いました。偏に高尾山各ご講中並びに十方有縁の御信徒による御信援、御法縁の賜物と衷心より感謝申し上げます。

さて、世情は相変わらず混沌としており世界各地においては未だ平和が回復せず、多数の無辜なる人々が犠牲になっております。我が日本国内に於きましても非常に多くの不安要素を抱えているように感じられます。

そうした一因に、本来人々に備わる全ての物事に対する謙虚な気持ちが無くなっている事、有るのではないかと思われるのです。自己意識が過剰に強くなり自己の権利のみを主張するあまり、国家や社会全般に必要と思われる利益を蔑ろにする傾向であると思えてなりません。

これは、人の心と心が温かく交流しお互いを尊重し合い、信頼と感謝で結ばれる人情が失われつつある事の表れではないでしょうか。私達人類は今こそ自利他の心に立ち返り、猛省する事が肝要であると感ずるのであります。

大自然の恩恵を受け、両親との縁により我が生命がこの世に授けられた奇跡、とりわけ国家公共のあらゆるお蔭によつて自分自身が生かされている事に対し「有難い・勿体ない」という気持ちを持って安寧秩序が満たされるようお互いに日々努力したいものであります。

高尾山御本尊飯縄大権現様の廣大無辺なる御加護のもと御信徒各位が今年一年、ひた向きに御精進頂き御繁栄の道を歩まれます事を謹んでご祈念申し上げます。

合掌

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(163)

岩間とどし

氷も今朝は

解け初めて

苔の下水

道もとむなり

(「西行法師家集」)

（岩の間を閉ざしていた氷も今朝は解け初めて、苔の下を流れる水が通り道を探し求めているよ）元日の夜が明け初めると、その力強い日の光に心打たれます。初日の出に限らず、いつもと変わらない日常の全てが今年初めて光景……新たな年を迎えた清々しさと希望を胸に抱きながら、今年一年の健康と幸せを願います。冒頭の和歌には「苔の下水」という歌語が詠み込まれています。「苔」は人の往来が少ないところに生えるところから「俗世間から離れた場所」を

意味し、「苔衣」「苔の袂」という言葉があるように「僧侶」や「隠者」にも喩えられます。続く「下水」には「物陰や物の下を流れる水」とともに、表面には現れ出ることのない「ひそかに心に思う気持ち」も込められているでしょう。この歌には、春を迎えて気持ちも新たに仏道を追い求めようとする僧侶の姿が見て取れるようです。

高尾山薬王院においても、日々一心に祈りが捧げられています。これまでの長い歴史の中で、どれほどの願いや思いを受け止めてきたのでしょうか。先月号では「北国街道」を辿りながら、飯縄大権現様の「靈妙な面影」を感じてみましたが、今回は実際に高尾山を訪れた二つの紀行文『高尾

紀行』を取り上げながら、その「祈りの面影」に思いを馳せてみたいと思います。まずは明治時代を代表する文学者、正岡子規（一八六七〜一九〇二）の紀行文『高尾紀行』に次のような句が見えます。

ぬかづいて

飯縄の宮の

寒きかな

鳴雪

（正岡子規『高尾紀行』）明治二十五年（一八九二）十一月七日、正岡子規と、その俳句の弟子であった内藤鳴雪（一八四七〜一九二六）は、師走の高尾山へ「俳句修行」の旅に出かけました。この句は鳴雪が、高尾山薬王院の御本尊、飯縄大権現様に詣でた際の想いを詠ったものです。初句「ぬかづいて」（額突いて）は、額を地に付けるように丁寧に拝む姿勢です。結句「寒きかな」には、冬の寒さと高尾山の厳肅な雰囲気も重ね合わされています。お山に



初日の出を拝し新たな年に希望を抱く

登つてこそ得られた有り難い心境と言えるものでしょう。あらためて、この一泊二日の旅の行程を眺めてみると、早朝の新宿駅から中央本線（中央線）に乗り込み八王子駅へと向かっています。途中、荻窪

窪の辺りでは、車窓から遙かに富士山を仰ぎつつ句作に励んでいる様子も記されています。中央本線（前身は甲武鉄道）は、明治二十二年（一八八九）中に新宿駅・八王子駅間が開通しました。荻窪駅は

と見え、東京観光を兼ねた旅でもあったのでしよう。早朝の青森駅六時二〇分発の汽車に乗り、仙台に一泊して、翌日の夜九時過ぎに上野駅に到着。さつそく不忍池に映る月を見て、

蓮葉の

露に宿れば

月見れば

秋の最中も

不忍池

（蓮の葉の露に映り込んでる月影を見てると、秋の最中（中秋の名月の頃）のように隈なく輝く不忍池であるよ）

と詠っています。東北本線・青森・上野間が全線開通したのは、明治二十四年（一八九一）です。から、まだまだ物珍しい鉄道旅であったでしょう。数日の東京見物をしてから、いざ高尾山へ。新から、中野・立川・日野を経て八王子駅に到着。高尾山麓の川面の宿から、北に向かつて九十九折の坂道三十六町をひたすら

登つて本坊薬王院に辿り着いています。清瀧・二本の松・琵琶瀧・一本杉・蛇瀧などの名所で歌を詠みつつ諸堂参拝。毎日盛んに行われる護摩祈祷について、高尾山 高き御法の ともしびを 高くかかぐる 峯の大寺 （あらゆる迷いを払い除ける法の灯火を、この世に広く教え伝える峯の大寺、ここ高尾山よ）

と詠っています。残念ながら真言宗正法寺の要所で不在であったため久しぶりの対面は叶いませんでしたが、その名を聞きつけた多くの僧侶によって歓待を受けたのでした。正岡子規と内藤鳴雪の二人旅も、妙海師の一人旅も、近代の幕開けを告げる鉄道の旅となりました。新しく敷かれた鉄路が、人々の思いや求道心をつなぐ「祈りの道」となったのです。（栃木北部教区普濟寺）

十八本山参詣(4)

正月遊総本山西大寺

真言律宗西大寺

朝聖大廳思往事

各殿佛像逃戦禍

九死一生祝拜醉

厚木市 荒井 一雄

綱渡り死に損なひが初登り

正月、総本山西大寺に遊ぶ

真言律宗総本山の西大寺……

諸堂参拝すれば三十年前初登山の

昔時を想ひ出す……

伽藍・仏像は長き歴史の中、 幸ひにも戦火を逃れ…… 期せずして我も大怪我をし、 危ふくお釈迦に成る所を 御本尊釈迦如来様のご加護により 再び祈り拜せる慶びを祝ひ酔ふ……

明治二十四年（一八九二）の末に開業していますから、子規が旅した頃は新しい駅舎だったかもしれません。ちなみに高尾駅（前身は浅川駅）の開業は明治三十四年（一九〇一）。八王子駅で降り立つた二人は、道々でコマ回しの大道芸を楽しんだり茶店で休息したりしながら風流の材料を探しています。

御本尊様をお参りした後は、山頂へと歩を進めました。広大な「武蔵野八百里」の景色を見下ろしながら、子規は一句を口ずさみます。

ぬけ出て山の

小春かな

冷たい北風を一步「抜けた」先にある穏やかな心持ちでしょうか。高尾山の山や水の美しさを肌で感じたからこそその感動と言えるものでしょう。

正岡子規一行が訪れた約半年後の明治二十六年（一八九三）六月、弘前金剛山最勝院（青森

紀行文には、一九九首の和歌が書き連ねられています。その冒頭には、

高尾山

高き御法の

門さして

いざ訪はむ

都見てから

（高尾山の山腹にある薬王院を目指して、さあ行って訪ねよう、東京の物見遊山も楽しみながら）

一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

四十八段 人生には向かい風も追い風もある

向かい風も追い風も、人生の歩みで出会う大切な巡りです。時に順調に、時に試されながらも私たちは日々を重ねていきます。恵まれた環境にあっても心を奢らせることなく、静かな謙虚さを忘れずに歩みを整えてまいりましょう。



八王子市 石井 雅子

健康登山者投稿作品 季節の絵手紙 「天道虫」

高尾山 季節散歩

和風月名

太郎月

「たろうづき」

一年の幕が開く一月には、「はじまり」を意味する異名が数多くあります。中でも太郎月は、「太郎」という語が長男を意味するだけでなく、物事の最初をあらわす語感もあり、そこから一月を指す言葉となったと伝えられています。

今月の風物詩

お年玉

お年玉は、もとは新年に歳神様の御加護を願い、その象徴として餅を家族に授けたことに始まります。時代と共に形は変わり、現在では子供へお小遣いを渡す習慣として受け継がれ、新年の成長と幸福を祈る風習となっています。

「干し柿」

八王子市 南保 仁恵



「ギンミズヒキ」

八王子市 栃谷 玲子



いけばなの心⑦

華道教授 佐藤 宗明

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いたします。

今回は「松竹梅」の生花をご紹介します。松竹梅の生花については、これまでにも二度、いずれも一月号にてご紹介してまいりました。

松竹梅は古来、祝儀の場にふさわしい花材です。また、三種の取り合わせ方には自由度が高く、季節や意図に応じてさまざまに取り合わせられる事も魅力のひとつです。

これまでの作品では、松を真として構成しておりましたが、今回は竹を真、副に梅、体に松を用いております。

太い竹を使用する際には、竹らしさを引き立てるため、水面近くに節が見えるように生けるのが



花材：松・竹・梅

良いと伝えられており、本作でも水際に竹の節が美しく現れるよう工夫いたしました。

本年も、いけばなの作品を通じて季節の移ろいと自然の恵みの美しさをお届けできれば幸いです。皆さまの一年が心身ともに健やかで、実り多いものとなりますよう、心よりご祈念申し上げます。



天狗面安全祈願法要厳修

十二月十四日(日)

十二月の冷たい空気が駅構内を包み、年末の足音が迫るJR高尾駅ホームでは、旅客安全・輸送安全・交通安全を祈る「天狗面安全祈願法要」が静かに執り行われました。

法要に先立ち、一年の汚れを払う天狗面の清掃が行われ、JR高尾駅の駅長を始め駅員の皆様、公益社団法人八王子観光コンベンション協会、高尾登山電鉄株式会社の方々に、お手伝い頂きました。

法要の折には、駅を歩き交う人々が次々と足を止め、共に祈りを捧げる姿が見られました。

天狗面は昭和五十三年十月に作成されて以降、高尾駅のシンボルとして親しまれて、高尾山へお参りにこられた御信徒の皆様や、高尾駅を利用される方々を日々見守っております。



天狗面に祈りを捧げる

観音菩薩の宗教

97

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音(その35)―仏教の性別観

仏教において誰が法を説くのか、すなわち説法者が誰かという問いは、単なる語り手の問題とは異なる。それは、大学の授業を誰が担当するかとか、芸能において誰が演ずるかといった問題とは違い、仏法の正統性、時には神聖性や権威にかかわる根源的な問題である。原始仏典の世界において、この問いへの答えはきわめて明確であった。なぜならこの時代、法(dhamma)の最終的正統性はブツダのみに帰属していたからである。前号で見たように『テーリーガーター』では、阿羅漢に達した長老比丘尼たちの悟りの内容が本人たちによって語られるが、それは中村元が標題にしたように「告

白」であって「説法」ではない。しかしそうであっても最終的にブツダが認め、嘉することによって、法の伝承の正しさが証明されている。

このほか原始仏典を見ると、比丘・比丘尼、さらには優婆塞・優婆夷(在家信者の男女)が説法を行う場面は少なからず見られるが、その正統性はいずれもブツダの「許可」を前提として成立していた。以下、本論では仏教における性別観、ことに女性の立場に主眼に置き、『勝鬘經』に先行する「仏法を語る女性」の例として、中部経典第四十四「小ヴェーダツラ経(Culavadda-sutta, Majjhima Nikaya 44)」「干渴龍祥訳「有明小経」『南伝大

蔵經第十卷、中部経典一、大蔵出版社、一九三六年、二二〇―二二三頁。漢訳相当經に『中阿含經』二二〇「法樂比丘尼經」大正大蔵經第一卷、七八八頁上段(七九〇頁中段)を見てみたい。

本経において比丘尼ダンマディンナー(Dhammanāma)は、優婆塞ヴィサーカ(Visakha)の問いに応じて、五蘊・四諦・八正道などブツダの思想の核心を説き明かす。繰り返しになるが、比丘尼は女性僧侶、優婆塞は男性の在家信者をいう。これはすなわち、女性が男性に法を説くという図式である。ダンマディンナーの説法を聴いたヴィサーカは歓喜して彼女に稽首・右繞(地に頭を付けて礼拝し、その周りを右回りに回ること)して礼を尽した。ところがこれほど歓喜、感謝したにも拘らず、ヴィサーカはブツダ(原文では bhagavat「世尊」)のところに赴き、聴いたこと一切をブツダに

告げる。経典自身はその理由を述べぬが、ヴィサーカの行動はダンマディンナーの述べたことが正しいかどうかの確認にほかならない。これに対しブツダは「ヴィサーカよ。比丘尼ダンマディンナーは、賢者であり、大慧者である」と嘉し、「私が同じ質問をされてもダンマディンナー比丘尼と同じように答えたであらう」と言い、さらに「その義を受持すべし」と命じている。

本経の重要な点は、ブツダの教えが比丘尼ダンマディンナーに正しく伝えられたことであり、さらに彼女がそれを在家信者のヴィサーカに伝導したことである。比丘尼が男性に伝法、説法することは部派時代には制度的に禁止されるが、このエピソードからは、ブツダ時代にはかかる制約のなかったことが知られる。しかしながら、ダンマディンナーはブツダの教えを会得してそれを語ったも

の、彼女が教主の立場になかったことは留意すべきである。本経によれば、彼女の語ったことは最終的にブツダに同意、承認されて初めて仏法として意味を持った。ここでは女性が卓越した説法者としてブツダにより承認されているにも拘らず、その承認はあくまで説法内容の正しさに限られており、教主性そのものは比丘尼に移譲されていない。原始仏典における女性説法者は、教えの会得に優れていても、ブツダの代理として一時的に法を説く存在に留まっている。説法者と仏法の正統性の両者は厳密に分離され、ことに後者はブツダに独占されている。この意味で、原始仏教における女性説法は「代理説法」であって、「教主性の分有」または「移譲」ではない。

この構造が大きく変容するのが、大乘経典の成立以後である。その例として『般若心経』を取り上げたい。『般若心経』に



聖観音菩薩立像。延暦寺横川中堂蔵。平安時代。重文。一説に右手の説法印で説法する観音菩薩を表す。『慈覚大師 円仁とその名宝』(NHKプロモーション、2007年、126頁)より

は、広本(大本)と略本(少本)が伝存し、日本を含む漢訳仏教圏によく知られた玄奘訳の『般若心経』は略本である。広本と略本の成立時期は未詳だが、漢訳の時代から考えると略本が先に成立し、後に前後の文を加えた広本が成立した蓋然性が高い。ただし、広本が先にでき、読誦や儀礼などのために前後を削って略本ができた可能性も否定はできない。

略本のサンスクリット原本(中村元・紀野一義『般若心経・金剛般若経』岩波文庫、一九六〇年、一七二―一七三頁)では、「一切智者に帰依す(Namas sarvajñaya)」(拙訳。以下同)の文に続いてすぐに観自在菩薩(観音菩薩)

が仏弟子の舍利子に對し空の思想、般若波蜜多の教えを説き明かす。説法の最後に「羯諦」偈を説き終わると、「くと般若波羅蜜多心(経)を説きき(iti prajñāparāmīta -hrdayam samāpīam)」と結んで経を閉じる。漢訳を通じて多くの日本人に知られ、また暗誦されるがごとしである。略本ではブツダと観音菩薩の関係は触れられない。これに対し広本では、本文の前後に「序分」と「流通分」に相当する文が加わっており、観音菩薩が仏弟子の舍利子に「説法する」経緯が説明される。「序分」には「かくの如く我聞けり(直訳は、このように私によって聞かれた)。あるとき世

尊、数多の比丘、菩薩らとともにラージャグリハ(王舎城)のグリドラクータ(靈鷲山)に在しき。そのとき世尊、深き悟りと名付けられる三昧に入りき」とある。次いで、観音菩薩は深般若波羅蜜多を行じていたときに「観じた(yavalokayatis na)」として、観音菩薩の説法が述べられる。「観じた」を中村元・紀野一義は「見きわめた」(前掲書、九、一七九頁)と訳している。この後、観音菩薩の説法の内容は略本同様で、説法の末尾に「羯諦」偈を説いて説法は終わる。

観音菩薩の説法の後に来るのが「流通分」で、これは略本にはない。広本のサンスクリット原文は日本の長谷寺に伝わった写本などがあり、夙に校訂され公刊されている。

広本『般若心経』の「設定」で注目すべきは、観音菩薩が説法するにあたり、ブツダは三昧していて観音に何も指示しないことである。観音菩薩は空の思想を自力で体得しており、ブツダは観音菩薩

と舍利子のあいだに交わされる説法を三昧の中で聴いている。ブツダは説法の内容を「善き哉、善き哉」と嘉するものの、略本でブツダの存在がカットされたように、ブツダなしでも観音の説法内容は成立する。原始仏典において説法する弟子や比丘尼は、あくまでブツダの教えを正確に伝達・解説する代理的存在であり、説法の正否は最終的にブツダによつて是認される。一方、『般若心経』における観音菩薩は、特定の教説を代弁するのではなく、覚りそのものを言葉として顕現させる者として現れる。かくてブツダはその説示を「善き哉、善き哉」と嘉することで、両者の覚りの同一性が確認される。原始仏典の説法者がブツダの教えを代理的に解説する人であるのに対し、広本般若心経の観音菩薩は、覚りそのものを語るものとして立ち現れる点に大きな違いがある。

八王子市仏教会成道会 東京多摩教区檀信徒教化推進会議

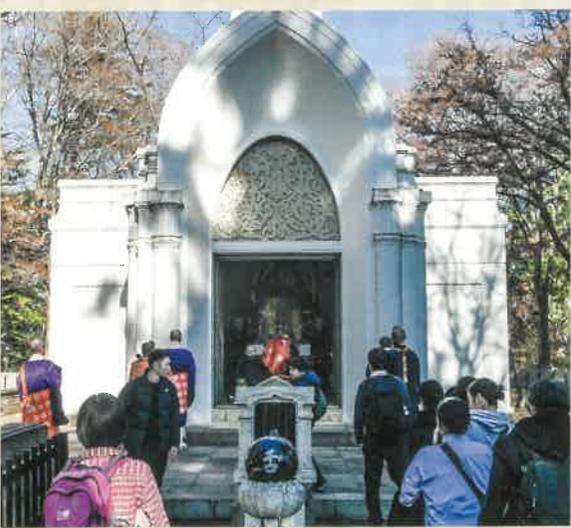
十一月十三日(木)

紅葉彩る高尾山において、八王子仏教会と真言宗智山派東京多摩教区共催による成道会及び檀信徒教化推進会議が開催されました。当日は有喜苑仏舍利塔において、八王子市内各宗派寺院と多摩地域の真言宗智山派寺院の皆様により、お釈迦様の成道を慶賛する法要が営まれました。その後当山貫首より「霊気満山高尾山くなぜこの山に人が集うのか」と題された講演が行われました。



成道会 厳修

十二月八日(月)



冬の澄んだ空気に包まれた高尾山上仏舍利塔に於いて、当山貫首導師のもと成道会が厳修されました。お釈迦様は三十五歳の十二月八日、菩提樹の下にて瞑想し、修行の末に真理を悟られ、「仏陀」すなわち仏様とされました。この悟りが「成道」と呼ばれております。

◎健康登山の皆様へ

高尾山報投稿の御案内 御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習憫、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※ 投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございます。すことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約三百万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々协会会员とられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。また、一冊に付き二十一回スタンプを押すペーシがあり、終了したことを満行と言います。満行されますと健康登山者限定の記念品などと交換ができます。



帳面……………七百年
スタンプ…百年

おはなし散歩道

山のレストラン 最後のお客さま

柏市 木村 研

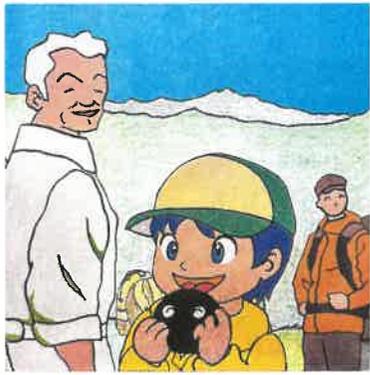
高い山の中ほどに、小さなレストランがありました。 「こんなところに？」 山を登ってきた人は、だれもがそう思いました。 しかし、長い間豪華客船で料理を作っていたシェフが、空気のいいところで、美しい景色を見ながら料理を食べてもらいたいと始めたレストランだとわかると、一度はそんな店でご馳走を食べてみたいと、みんながおそろおそろ店に入ってきたものです。

「店は私一人です。時間がかかりますよ。それで良ければ……」 青井さんはいつも不愛想に答えていました。 お客さんが二、三組でも入れれば、それだけで杯になる店です。それでも、それから注文を取ってはかかります。でも、見晴らしのいいレストランですから、誰も文句なんか言いません。 みんな、ゆつくり食事を楽しんでから山に登っていききました。 そんなある日のこと。 お昼のお客さんが帰って、やっと一息ついたころ、山を下りてきたお父さんと小さな男の子が店に入ってきました。

「ごめんさい。今日はもう材料がなくて……」 青井さんがいつものように不愛想にいうと、 「この子が気分悪くなつて、山頂で休んで山を下りてきたので、まだ昼を食べていないんです」とお父さんがいいました。 「じゃあ、ぼうず、お腹がすいてるのか？」 青井さんが聞くと、男の子は、小さな声で、 「朝のおにぎりも崖の下に落としてしまったから」と、いいました。 「そうか。落としたか。じゃあ、おじさんの晩ごはんでもいいか？」 「おじさんの？」 「ああ」

そういうと、青井さんは奥に入つて、真つ黒のボールのようなものを皿にのせてもどつてきました。 それは、のりを巻いたおにぎりでした。 おにぎりには、豆のような目がついていて、耳のようにたくあんが二枚添えてありました。 「わあ。くまだ。くまさんのおにぎりだ」 男の子が、うれしそうにおにぎりにかぶりつきました。そして、おいしそうにおにぎりを食べるのです。おにぎりになって、山をおりてきました。

それから何年かして青井さんが山をおりる日がやってきました。 山をおりると、青井さんは、もう何もすることはありません。 レストランを閉めて、名残惜しそうに山の姿を目に焼き付けていると、 「やあ。間にあいましたね」と、大きな荷物を背負った若者が急ぎ足で山を上ってきました。 * * * それからしばらくすると、青井さんの姿が町の子ども食堂見られるようになりました。 そんな正月のことです。 「やあ。青井さん、元気そうですね」 山であった若者が大きな荷物を背負って入ってきました。 若者は、今、世界中の山々を回っているアルピニストでした。 若者は、子どものおにぎりを食べたことが忘れられなくて、それ



(挿し絵・小出 茂)

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

73

二十世岳純8『八王子名勝志』その4

『八王子名勝志』の記述は奥之院へ到達した後、「還路は坂を下りて西の方に平坦なる所に出れば、すなわち別当薬王院の表門なり」と続く。

別当薬王院

現在においては山上の伽藍全体が高尾山薬王院の寺域であるが、江戸期においては現在の大本坊のある一画が薬王院の境内とされていた。それは、薬王院もまた、数多の堂宇・社殿が分布する高尾山という聖地にある一寺院という位置付けによる。ただし、薬王院は高尾山の「別当」という立場にあり、全山を支配し、薬王院住職は当時においても「山主」と呼称されていた。

この薬王院へ下る経路は三巻でやや詳細に修正されているが、境内の様子が見てとれるので引用してみよう。

還路には奥院より下りて御本社の前に至り、額堂の脇より東坂を下り、薬師堂の傍らに出で、それより夷塗を西の方へ仁王門の先なる石坂を下れば、黒門通りの往還にして、すなわち別当有喜寺薬王院の表門なり。

地誌という体裁の本書であるが、この下りはあたかも紀行文を読むかのようである。奥之院道を戻り飯縄権現社の前を横切ると、絵馬を掲げる額堂があり、「東坂」とは、現在の大師堂の前に降りる道筋である。現在の大

本堂の位置にあつた薬師堂の傍らからは「夷塗を」とあり、字義になじみがないが、「たひらみち」のふりがなが付されている。「夷」の字には平らの意味があるので、一帯の平地のことになるのか。仁王門を左手に真つ直ぐ進むと大本坊へ至る石段がある。そこを降りると、黒門通りの往還」とあるが、

当時において「黒門」とは、前段の黒塗の「惣門」のことなので、そこから広庭を経てきた道筋を意味することになる。当時の薬王院表門は、現在の「黒門」の位置にあり「檜皮葺四足門」だった。

現在は書院、方丈殿、客殿、有喜閣で構成される大本坊であるが、当時の薬王院境内もまた、いくつもの建物で構成されていた。本文に掲げられているだけでも、本堂、御供所、接待茶屋、玄関・書院、向屋敷があり、挿絵を見れば白雲閣という先の玄関・書院は屋根の入り組んだ建築で、方丈

庫裏が連結し、基壇に石垣を積んだ土蔵も何か所か見える。これらの建築群は明治二年（一八八八）の「境内伽藍惣絵図」という詳細な平面図に符合する。「閑素幽栖の山中といえども」と述べられるように、山中にこのような建造物群のあることは驚きに値しよう。

薬王院の建築群

これらの伽藍は、残念ながら昭和四年（一九一九）の大火で焼失してしまったが、今はなき建築群について、本文の記述と挿絵からその様子を偲びたい。

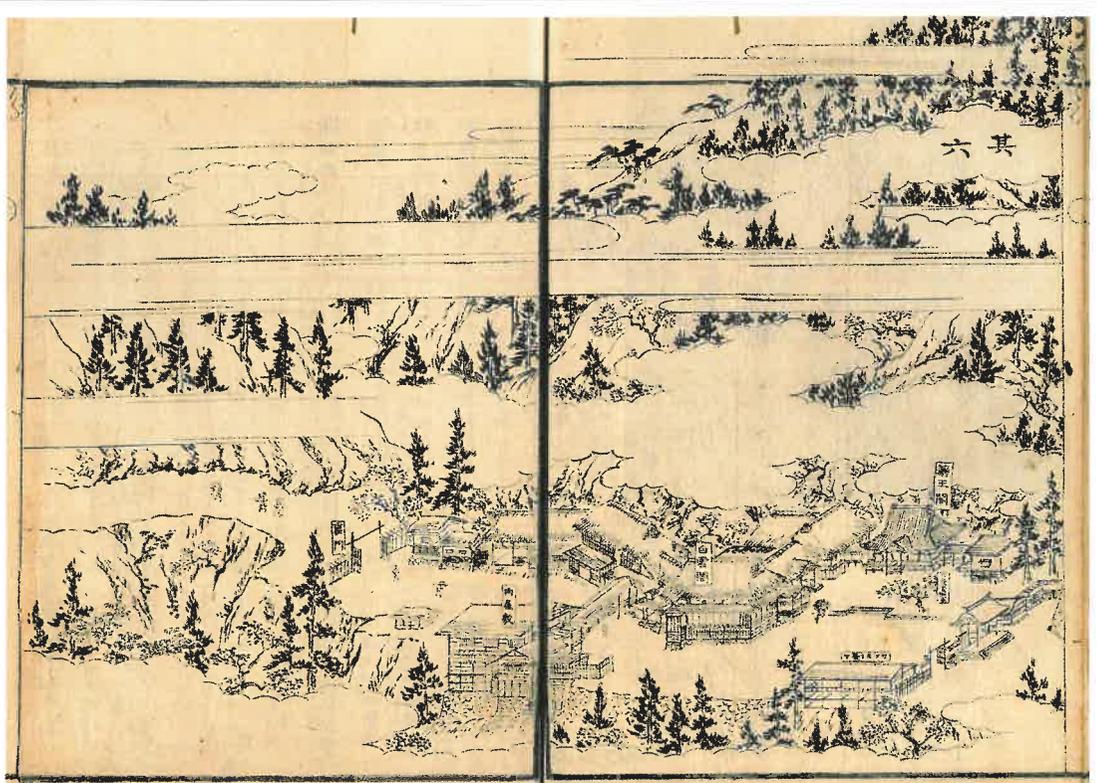
表門を入った左手の崖端にあつた「接待茶屋」は「四方かけはらい眺望至つてよし」「多波の土産」（二八二八）という紀行文の著者はここで茶菓の接待を受けていた。本堂の前には「七度変わり紅葉樹あり（三巻）」「玄関・書院」は「壮麗奇観、眺望よく」と、令和五年四月号に焼失前

の写真を掲載したが、「唐破風」の付いた玄関に、母屋の屋根はその形容にふさわしい。床の間には「霊應観」の額が掲げられ、豊後岡城主中川久徴の筆と言う。管見のところ同人との関係はこの記事以外には見当たらず、来歴は残念ながら不明である。

「書院」から回廊を渡る崖端の「向屋敷」は二階建てで、「信者の詣人当山に祈願し、護摩を焚き、神影ならびに護符を乞える輩、御籠りと号け旅宿を請う」とする。この向屋敷の風情は、参籠者がしばしば竹む場所だけに、その修辞も際立つ。

昼は風景秀麗にして、夜は幽情静寂なり。けだしここに宿する旅客は実に紅塵を去りて仙境に至るの趣あり。

「紅塵」は都市に立つ土ぼこり、あるいは世俗のことを言い、煩雑な日常から離れて憩いの時を満喫する江戸人の心持は、



別当薬王院の伽藍 『八王子名勝志』 国立国会図書館デジタルコレクションから

現在の我々と変わらぬ。

あるいは仏法僧鳥の鳴くを聞きては、峨眉山^{註2}の景勝ならでも仏現了はありけりと思ひ。猿の叫びを聞きては、巴江^{註3}三峽の遠情もここにこそと思はる。

「仏現」は仏が現れること。「了」は「おわんぬ」で、そのまま「了した」という意味に取っておけばよいだろうか。

裏門から小仏峠へ向かう富士道に言及し、中興開山の俊源が使ったという「独鈷井」に続いて略縁起が述べられ、記事の終わりとなる。崖崩れで埋没し

て現在地不明とされる独鈷の井戸だが、「夏日は草深くして至り難し」とあるので、すでに位置は確定できなかったようだ。「大干石を焦がすとも水涸れることなし」という霊泉であった。水の豊富な様子は現在も福徳弁財天の洞窟に偲ぶことができる。三巻は略縁起を前段の飯縄権現社とこのろに移し、独鈷井の後で富士道へ言及して記事を終えている。

註1 久徴は岡藩（大分県）藩主中川久貞の三男で、天明三年（一七八三）に結城藩（茨城県）水野家へ養子に入り勝剛と名乗っている。したがって「岡城主」には当たらない。

註2 中国四川省にある仏教の一大聖地。
註3 巴江は中国雲南省の川。李白が「猿啼三声淚沾裳」と詠んだのは揚子江上流の三峽である。《参考文献》加藤典子「解題」（『八王子名勝志』一）八王子市教育委員会、二〇二五



1984・85年頃の薬王院大本坊

おことわり 『八王子名勝志』は挿絵を掲載する第三巻の後半と、第四巻の前半に高尾山の記事が重複しており、四巻の記事の成立が嘉永二年（一八四九）と早く、安政四年（一八五七）頃にまとめられた三巻の草稿と考えられています。本連載では四巻を読み進めながら、適宜、三巻で増補された記事を加えています。なお、史料の引用については、適宜、読みやすく原文に手を加えています。



新たな年の安寧を祈る 正月限定 新春特別祈禱札

令和八年も正月期間（一月一日～一月三十一日）限定で「令和新春特別祈禱札」を授与致します。

近年は自然災害や疫病の流行等、様々な災厄が頻発する時代であります。しかしながら、年が改まり心機一転する正月を迎えるにあたり、種々の災いが少ない、明るい一年となるようにと、特に御祈願申し上げる次第であります。御信徒の皆様方におかれましては、この機会に是非御来山を頂き、新たな年の安寧を共に御祈り下さいますようお願いいたします。

ご祈禱料は一体三萬円となります。

願意（お願い事）は「除災開運」のみとなります。

御来山当日でのお申込みも可能ですが、正月期間の御護摩受付所は混雑が予想されるため、事前にお申し込みも頂きます。また、御信徒様各位の御都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に宅配でのお取り扱ひもいたしておりますので、ご希望の方は下段の記事をご参照下さい。

御護摩札及び御守等 郵送・宅配申込方法について

当山では、年間を通して遠方の御信徒様や、高尾山へ直接御参拝することが難しい方々の為に、御護摩札をはじめ各種御守等を、郵送及び宅配にてお受けしております。

お正月御護摩札のお申し込みにつきましては同様に、お手紙やFAX、または「高尾山公式ホームページ」内の「御護摩札 郵送申し込み」からインターネットにて承っておりますので、ぜひご利用頂きますようお願い申し上げます。

また、各種御守りをはじめ、天狗団扇や熊手等のお正月限定の縁起物の郵送をご希望の際には、お電話にてお問合せ下さい。

お問い合わせ先の電話番号、FAX番号につきましては左記の通りとなりますが、ホームページのアドレス及びQRコードにつきましては、二十ページ下段に記載されておりますので、そちらをご参照下さい。

TEL 〇四二一六六一一一一五
FAX 〇四二一六六四一一九九

- お電話やFAXにてご連絡を頂く際には、次のように御護摩係か郵送御守係までお願いいたします。
- 1 御護摩札のみ
 - 2 御護摩札及び御守
 - 3 御守のみ
- （ ） 御護摩係まで
郵送御守係まで

御護摩修行のおすすめ 皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様が祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯繩大権現」とお唱え下さい。



御朱印のご案内

御朱印とは本来、心願成就を祈り書き写した経文（般若心経・観音経等）を、御本尊様の宝前にお納めし、その祈願を込めた印として頂いたものです。

現在は神社仏閣への参拝の証として、御朱印を頂く場合が多いようです。

高尾山は霊山として、又、多摩新四国第六十八番、関東三十六不動尊第八番の霊場の札所としてもその名を知られており、季節限定の御朱印など、様々な用意しております。

尚、御朱印は御本尊様の御分身に当る宝印であります。大切に護持頂きまして、益々御本尊様のご利益に浴せられますよう心よりお祈り申し上げます。

高尾山薬王院の御護摩札

<p>交通安全 (ステッカー) (車内用札)</p> <p>※お供物持ちません</p> <p>最大巾5.5×長12.5cm</p> <p>(大) 10,000円 (中) 5,000円 (小) 3,000円</p>	<p>お護摩</p> <p>最大巾8.6×長35.5cm</p> <p>お護摩 3,000円以上</p>	<p>お護摩</p> <p>最大巾8.5×長37.7cm</p> <p>お護摩 5,000円以上</p>	<p>お護摩</p> <p>最大巾9.5×長42.3cm</p> <p>お護摩 10,000円以上</p>	<p>特別大護摩</p> <p>最大巾12.0×長48.5cm</p> <p>特別大護摩 30,000円以上</p>	<p>開帳大護摩</p> <p>最大巾12.0×長54.5cm</p> <p>開帳大護摩 50,000円以上</p>	<p>特別開帳大護摩</p> <p>最大巾14.3×長60.5cm</p> <p>特別開帳大護摩 100,000円以上</p>
<p>() 内の略称をお書き下さい</p> <p>お護摩の願事</p> <p>お願い事は一体一願意とします。</p> <p>併願(二願意)は一万円より受け賜ります。</p> <p>但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせていただきます。</p> <p>お護摩札には年令・生年月日等は入りません。</p>						
<p>家内安全(家)</p> <p>商業繁昌(商)</p> <p>事業繁栄(事)</p> <p>交通安全(車内用札)</p> <p>交通安全(神棚用木札)</p> <p>身上安全(身)</p> <p>災難消除(災)</p> <p>厄除(厄)</p> <p>身体健全(体)</p> <p>当病平癒(病)</p> <p>開運(開)</p> <p>良縁成就(縁)</p> <p>安産成就(安)</p> <p>入学成就(入)</p> <p>心願成就(心)</p> <p>御札(札)</p> <p>奉納杉苗(杉)</p>						

令和八年 丙午(ひのえうま)
高尾山節分会追儺式参加申込の御案内



二月三日(火)

歳男・歳女 修行時間

第一回	午前七時半
第二回	午前九時
第三回	午前十時半
第四回	正午
第五回	午後一時半
第六回	午後二時半

尚、修行時間の三十分前、もしくは、定員になり次第受付を締め切らせていただきます。もし時間に間に合わない場合は次回の修行時間にお入り頂きますので、何卒、ご了承下さいませ。

冥加料(祈禱料)三万円

高尾山では、身上安全・事業繁栄・諸縁吉祥・除災開運など、諸願成就を祈念する恒例の節分会追儺式を執り行います。是非この機会に「歳男・歳女修行者」としてご参列賜り、「福は内」と声高らかに福豆をお撒き頂ければ幸いに存じます。福を招いて災厄を祓い、皆々様がより一層のご健勝にお過ごしになり、更なるご活躍されま

お申込みについて

ホームページでの
ご案内

お申込みや資料請求につきましては、高尾山薬王院公式ホームページ上に掲載しております当該ページをご参照下さい。

お電話での
お問い合わせ

節分会追儺式「歳男・歳女修行者」の詳細につきましては不明な点がございましたら、左記担当窓口までお電話にてお問い合わせ下さい。

お問い合わせ先
担当：節分会追儺式係
電話番号
〇四二(六六一)二二一五

高尾山火渡り祭

(令和八年三月八日 日曜日)

柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

當山では毎年三月第二日曜日に春を招く恒例行事として、祈祷殿火渡り本尊ご寶前にて、高尾山修験道による火渡り祭が盛大に執り行われます。火渡り祭とは、當山貫首大導師のもと、全国各地の靈山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈禱法要であります。この浄行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて供される、御本尊・飯繩大権現様の功德を顕す御壇木のご志納を一本二万円にて募っております。ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信助を賜りますよう、謹んでお願いを申し上げます。尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院参道に一年間掲示致します。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒部までお問い合わせ下さい。

祈大願成就 身体健全

高尾 登



電話 〇四二(六六一)二二一五
FAX 〇四二(六六一)二九九
大本山 高尾山薬王院 信徒部

火渡り祭「なで木」の功德

「なで木」とは御本尊様の大慈大悲の御手であります。年齢・氏名を御記入の上、健康な方は益々壮健であるように、お身に病の生じている方は、御本尊様を念じながら「なで木」でその患部を撫でさすり下さい。高尾山火渡り祭において、柴燈大護摩供の護摩木として山伏により、



なで木料 一座二百円

お知らせ

高尾山では、御壇木御志納の申し込みを、お電話・ファックス等で受付けております。高尾山報の一月号に同封いたしました、郵便振替「払込取扱票」を利用してもお申し込み頂けますよう便宜を図りましたので、よろしくお申し込み申し上げます。「払込取扱票」でお申し込みを頂く際に、願意(お願ひ事)が未記入でご連絡がつかない場合、「身体健全」とさせて頂きます。また、火渡り祭の時に名前を讀み上げますので、フリガナの記入もお願い致します。尚、「払込取扱票」は、高尾山報助成金の振替にもご利用いただけます。



大般若経を守護する十六善神の図

毎月二十一日 午前九時(於大本堂)
御志納金 一口 三千円以上

当山では、御本尊飯繩大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物(百味)を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。
尚、法要終了後に大本堂にて百味供養の御札を授与致します。
また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ



大本堂における大般若経転読会



一月御供修 大本山
百味御志納御守護
高尾太郎殿 高尾山

八王子市	岩澤	君江
〃	羽生沢	常男
新座市	彰山	粧麗
小平市	関	道雄
港区	増田	タカ子
八王子市	菱山	愛子
相模原市	鎌谷	典枝
川越市	島村	文子
比企郡	谷口	正子
入間市	垣沼	ひとみ
熊谷市	柿沼	博
八千代市	稲越	俊光
高崎市	植杉	晴夫
川崎市	鹿島	市郎
三鷹市	岡野	大治
狭山市	富田	衛
八王子市	永井	寛子
台東区	山下	ヒデ子
板橋区	河西	和子
〃	鎌田	真弓
国分寺市	西沢	満男
小平市	山田	裕司
東村山市	安藤	和子
日野市	魚地	眞道
八王子市	田中	邦宏

高尾山報助成金志納者 御芳名(順不同・敬称略)

八王子市	町田	良樹
〃	高木	孝子
町田市	小平	末喜
海老名市	松政	伸
相模原市	佐久間	宣行
足利市	清水	松代
久喜市	本伏	義一
飯能市	泉田	隆子
熊谷市	松岡	健次
深谷市	田尻	廣子
秩父市	神林	厚夫
前橋市	野口	道雄
太田市	森山	智子
桐生市	中里	雅巳
新潟市	寺門	義昌
仙台市	本郷	則子
あきる野市	石堂	清雅
福生市	山本	清雅
小千谷市	成	就
八王子市	石井	忠明
高尾山健康登山者一同		

高尾山報助成金 御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報をご送付しております。
引き続きご愛読して頂きますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

高尾山慶賛会入会のおすすめ

「物で栄えて心で滅ぶ」という言葉は、昨今の世相を端的に表現しているようです。
経済発展の代償として、公害、交通禍、その他様々な弊害が生じ、経済的には豊かになりながらも、心は貧しく刺々しくなり、社会全体が人々の「迷いの心」で覆われております。かかる時代こそ、心に「うるおい」を与える存在として信仰心が必要であり、信仰の暖かい心を通じて愛情、尊敬、感謝などの心を養い、人間味豊かな社会を建立したいものと念願しております。

高尾山は自然と伝統文化が現在に受け継がれていることから「靈氣満山高尾山」として日本遺産に認定され、多くの参拝者が訪れております。
こうした恵まれた環境の中にある薬王院には、古来より僧侶だけではなく、広く一般からの篤志家に参加して行われる、多くの年中行事が伝承されております。高尾山慶賛会は、こうした各種の行事を奉賛し、以て御本尊を尊信し、その御加護を仰ぎ明るく暖かく、そして豊かな生活を送ることを目的とするものであります。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入御協賛を頂き、御本尊様の威神力に浴されますよう念願するものであります。



侍衣装を着た慶賛会の皆様

お申込・問合せ

年会費 一口五千元

申込方法 お手数ですが「高尾山慶賛会係」までお問合せ下さい。

申込用紙を発送致します。

〒一九三-八六八六

八王子市高尾町二七七

高尾山薬王院(慶賛会事務局)

TEL 〇四二-六六一-一一一五

FAX 〇四二-六六四-一一九九

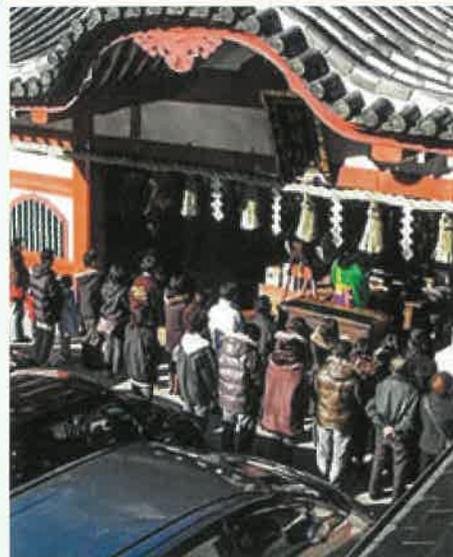
人車一体交通安全祈禱 高尾山麓 自動車祈禱殿

正月御祈禱時間

元日 午前0時より午後四時まで
二日・三日 午前八時より午後四時まで
四日〜七日 午前八時半より午後四時まで

交通事故は偶然生ずるものでなく、多くの場合には、運転者並びに歩行者の心構え一つで防止できるものです。心に安らぎを得て、安定した気持ちで運転して頂く事が大事と考えております。
年に一度は、高尾山の山伏による人車一体の「おはらい」を受けることをおすすめいたします。
複数台をお申し込みの場合には、事前にFAXにて受け付けております。

電話：〇四二-六六一-一一一八
FAX：〇四二-六六二-一一三五



車と人が共に交通安全のおはらいを受ける



春の行事

初詣 迎光祭
新年特別開帳
大護摩供奉修
初午 (福德稻荷祭)
二月一日(日)
節分会(厄除開運の豆まき)
二月三日(火)
釈尊涅槃会
二月十五日(日)

初甲子(福德大黒天祭)
二月十九日(木)
火渡り祭
三月八日(日)
滝開き
四月一日(水)
花まつり(仏舍利塔)
四月八日(水)
春季大祭(稚児練行)
四月十九日(日)



令和八年
丙午(ひのえうま)
大本山 高尾山

— 新春大護摩奉修特別時間 —

	1日 木	2日・3日 金・土	4日 日	5日~7日 月~水	10日~12日 土~月(祝)	18日・25日 日	8日以降平日 17日・24日・31日
午前	0:00						
	2:00						
	4:00						
	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00
	7:30	7:00					
	9:00	8:00	8:00	9:00	8:00	9:00	9:30
	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00	11:00
午後	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00
	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00		
	1:00	1:00	1:00	1:00	1:00	0:30	0:30
	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00
	3:00	3:00					
	4:00	4:00		3:30	3:30	3:30	3:30

★正月期間中は御護摩受付所や大本堂周辺は、大変混雑致します。
お昼前後の御護摩修行には大勢の御信徒様が集中することが予想されますので、混雑回避のために、時間を調整しての御来山をお勧めいたします。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 犬山秀康
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院
ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>
下記QRコードからもアクセスできます



二月行事日程

一日~七日
聖天秘供(聖天堂)

十二日、二十四日
弁天秘供

十日、十七日
御詠歌勉強会(十時不動院)

八日
仏舍利詣り(仏舎塔)

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供

二十二日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」

二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

月例写経会
(十三時山麓不動院)